

人口流動化による民族混住

——中国・西双版纳タイ族自治州におけるタイ族と流入漢族——

菅野博貢

はじめに

- I 西双版纳の発展と漢族流入
- II 流入漢族の実態
- III 先住民タイ族の実態
- IV 西双版纳における民族混住社会の特色と問題点
むすびにかえて

はじめに

本稿は、中国・雲南省西双版纳タイ族自治州（以下、西双版纳と略す）景洪市^{ジンホン}で進行する、都市化に伴って流入した多数の漢族^{シヤンパンナオ}（注1）と、先住民タイ族^{タイ族}（注2）との間で生じた新たな民族混住をテーマとしている。

周知のとおり、中国では1980年代後半から、沿海部の大都市を中心に急激な経済成長が続いており、それに伴って内陸の農村部から多数の労働者が都市に流入している。彼らは、「民工潮」と呼ばれ、時として既存の都市社会の秩序を乱す要因のように扱われるが、このような現象と同様のことが、雲南省南端の西双版纳でも発生しているのである。だが、西双版纳について見ると、漢族が流入した既存の社会が少数民族のタイ族社会であったことに加え、都市形成が現在進行中の農村社会であったことは、沿海部の大都市の状況とは大きく異なっている。

流入した漢族の多くは、都市の拡大とともに都市周辺の農村に居住地を広げていったが、彼

らは地縁、血縁を頼りとして、集団で生活の場を築いている。そしてその過程で、先住民であるタイ族社会に大きな影響を与えるとともに、既存の農村社会を根底から変化させている。本稿では漢族とタイ族の両者の側から、現在進行中の民族混住の現状とそこで発生している種々の社会問題について考察する。

なお、これまでの研究において混住をテーマとする研究には異なる2つの場合があるので、簡単に整理しておく。その1つは異なる複数の民族が1カ所に混在している場合を対象とするものであり、もう1つは都市と農村の境界領域で都市的なものと農村的なものが混在している場合を対象とするものである。

多民族の混住についての研究は、経済学者のJ・S・ファーニバル(Furnivall)が蘭領インド(現インドネシア)を対象として分析した「複合社会論」や、社会人類学者のE・R・リーチ(Leach)がミャンマーで行なった研究が初期の代表的なものである^(注3)。近年では、文化人類学や社会学の分野での研究が比較的盛んであり、特に都市内部における多民族の混住を動態的に捉えようとする研究^(注4)が注目されるが、本研究のように都市空間形成過程における混住化の状況については、踏み込んだ論考は行なわれていない。民族の混住を空間的に扱った研究としては、建築、都市計画の分野において、高井宏之ほかの

シンガポールの高層住宅を対象にしたものや、宇高雄志ほかのマレーシアの高密度居住地域を対象としたものがあるが、これらの研究はどの時代の大都市にもありえる民族的雑居状態の現状を報告しているものであり、時系列上で混住化の過程を捉えようとする本稿とは基本的に視点が異なる(注5)。

一方、都市の拡大に伴う都市と農村の境界領域における混住化についての研究は、E・ワード(Howard)の『明日の田園都市』や柳田国男の「都市と農村」をはじめとして、国内外において数多くなされてきた(注6)。特にわが国では、高度経済成長に伴う急激な都市化の中で生じた混住化地域を対象とする研究が盛んであり、主に建築、都市計画の分野で活発に取り上げられてきた。これらは境界領域の独自性を説くとともに、この領域における地域社会の形成、居住者の意識や地域活動などについて論じている(注7)。

本稿における対象の捉え方としては、後者のような日本国内で蓄積されてきた都市-農村の混住研究の延長線上にあるといえるが、前者のような多民族の混住という要素を重ね、二重の意味での混住化をテーマとしている。その点において研究の独自性を有すると考える。

なお、前報(注8)においては、新中国成立以降の西双版纳への漢族の流入の歴史をたどり、新中国成立直後からの国营農場の建設期、文化大革命期、そして1990年代の「民工潮」による流入の3期に分けて、漢族が辺境地域に居住域を拡大してきたプロセスについて考察した。本稿では、その後に行なった現地調査の収集資料をもとに、1990年代以降の漢族流入にしばって論考する。

現地調査は1987年以降数次にわたるが、先住少数民族の集落環境の変化のメカニズムを明らかにすることを主な目的とする調査は、89年、91年、93年、95年のいずれも9～12月の間に実施し、西双版纳の中心都市である景洪周辺の3集落(曼景蘭^{マンチンラン}、曼听^{マンティン}、曼竜寛^{マンロンカン})の住居の悉皆調査を試みるとともに、それら集落に隣接する都市周辺地区の環境の変化について記録している。また、1993年9～11月には新中国成立(49年)直後に移住した農民の動向調査、94年の3～5月には、対象集落と市街地に居住するタイ族および主に市街地に居住する漢族に対する居住環境の変化についての意識調査、94年の3～5月と95年12月～96年1月には近年の流入者に対する動向調査、および意識調査を行なっている。本稿は、1995年12月～96年1月の調査によって収集したデータを中心的な資料としているので、ここではこの期間の調査についてのみ記述する。

現在、タイ族の集落に流入する漢族の居住形態は、いずれの形にせよすべて集住形態をとっている。この集住形態は、大きく2つに分けられるが、その1つは、先住民族であるタイ族の伝統的な住居形態である高床式住居の床下空間をいくつもの部屋に仕切って居住スペースとするものであり、他の1つはタイ族の土地に建設された集合住宅に居住するものである。このようなタイ族集落に居住する流入者を主な対象とする調査では、まず対象集落(曼景蘭)における流入者世帯の位置を居住形態とともにすべて記録したうえで分布図を作成し、次に対象集落内から任意に選んだ40カ所の高床式住居の床下に居住する流入者世帯(313世帯、719人)について聞き取り調査を行なった。聞き取り調査では、出身地、年齢、職業などの属性のほか、現在の

生活に関する満足度、家主であるタイ族への意識なども調査した。

一方タイ族については、景洪の南に延びる曼听路沿いの3集落の住人を対象としているが、この3集落(曼景蘭、曼听、曼竜寛)は市街地からの距離がそれぞれ異なる。市街地に接している曼景蘭(戸数184戸——1993年)では、当然市街化の影響が大きく、現在では市街地の一部といってもよい状況に至っている。曼听(戸数92戸——1993年)はこの曼景蘭から約1.5キロメートル南にあり、1992、93年頃から徐々に市街化が進行してきている。その一方で、さらに1キロメートルほど南に下った曼竜寛(戸数76戸——1993年)では、1994年まで自動車が入ることのできる道路さえなかったこともあり、まだ市街化の波は及んでいない^(注9)。この3集落のタイ族住人について、漢族が流入したことによる生活の変化を就業形態や農地面積、収入の変化などを中心に聞き取り調査を行なった。調査戸数は曼景蘭100戸、曼听50戸、曼竜寛41戸である。

なお、調査期間の制約上、主に漢族を対象とした40カ所の高床式住居の床下居住の調査と、タイ族を主な対象とした3集落191戸の調査は、異なる調査班によって同時に、相互独立に実施された。また、これらの調査は、主に雲南民族学院の元講師と卒業生等の協力を得て実施された。本論はこれらの調査結果を分析し、考察を加えたものである。

(注1) 流入者の中には漢族以外の少数民族も含まれているが(後出表2参照)、流入者の中に占める漢族の割合が圧倒的に多いこと、都市建設の担い手が漢族であること、都市化につれて産業別比率の高まっているサービス産業が漢族によってもたらされていること等から、西双版纳に見られるさまざまな社会現象は、先住民族であるタイ族対漢族という構

図の中から生じていると捉えられる。したがって、本稿の記述においては「流入者」を「漢族」と表記する。

(注2) 西双版纳のタイ族には、水タイ族(タイ・ルー族——かっこ内は自称、以下同)、干タイ族(タイ・ナー族)、花腰タイ族(タイ・ブン族)の3つの支系がある。本論で対象としているのは水タイ族である。

(注3) J・S・ファーニバルの「複合社会論」については、『文化人類学辞典』弘文堂 1987年を参照。E. R. Leach, *Political Systems of Highland Burma* (London: G. Bell & Sons, 1954)については、関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂 1987年を参照。

(注4) 前田成文『東南アジアの組織原理』勁草書房 1989年/山下晋司「ウジュン・パンダンのトラジャ社会——インドネシア地方都市研究——」(『東南アジア研究』第23巻第4号 1986年3月)/今野裕昭「インドネシアの都市化と都市社会」(北原淳編『東南アジアの社会学』世界思想社 1989年)など。

(注5) 高井宏之ほか「シンガポールにおける高層住宅居住の実態」(『日本建築学会計画系論文報告集』第431号 1992年1月)/宇高雄志・東樋口護「ジョホールバル都市圏の住宅団地における民族混住とその空間利用——マレーシアの民族混住と居住空間計画に関する研究——」(『日本都市計画学会学術研究論文集』第29号 1994年/宇高雄志・東樋口護「多民族社会の住宅団地での画一的住戸空間に見る民族性——マレーシアの多民族居住と居住空間計画に関する研究——その1」(『日本建築学会計画系論文報告集』第489号 1996年11月)。

(注6) E・ハワード『明日の田園都市(1898)』鹿島出版会 1968年/柳田国男『都市と農村(1929)』(『定本柳田国男集』第16巻 筑摩書房 1970年)。

(注7) 鎌田元弘・土肥博至「都市近郊地域における居住環境整備の課題 その1~4」(『日本建築学会計画系論文報告集』第382号 1987年12月, 第393号 1988年11月, 第407号 1990年1月, 第420号 1991年2月)/三国正勝・中村攻「混住地域における居住環境整備の課題 その1~2」(『日本建築学会計画系論文報告集』第361号 1989年3月, 第367号 1989年9月)/伊藤庸一「近郊農村における地域的な活動単位に関する考察」(『日本建築学会計画系論文報告集』第392号 1988年10月)/藍沢宏・七条典之

「大都市近郊混住地域における地域社会形成に関する研究」（『日本建築学会計画系論文報告集』第449号 1993年7月）など。

（注8） 菅野博貢「中国・西双版纳タイ族自治州への漢族移住とその社会的影響」（『アジア経済』第36巻第4号 1995年4月）41～64ページ。

（注9） 曼听、曼竜寛とも集落本体から数百メートル離れた位置にさらに十数個の住宅を確認できるが、連続した一まとまりの集落を研究対象とする意図から、これらは調査範囲には含めていない。

I 西双版纳の発展と漢族流入

1. 西双版纳の発展

本稿で対象とする雲南省西双版纳タイ族自治州の州都である景洪では、近年急激な都市開発が進んでいる。本稿ではこの急激な都市拡大に伴う流入人口の急増と、それが先住民族社会に及ぼした影響について論考していくが、最初に、なぜこのような辺境の地で急激な都市開発が継続的に行なわれ、広い地域から多数の流動人口を引き付けているのか、その要因について簡単に整理したい。

景洪市についての詳細な統計データは入手できないが、筆者が初めて景洪を訪れた1987年の都市人口の推計が1万人に満たなかったのに対して、95年末の推計では約15万人以上に達しているといわれている^(注1)。しかも、この推計には「民工潮」として流入している人々は含まれていないので、実際の数字はさらにそれを上回るものと考えられる。この人口の増加に伴って、市街地の面積も急速に広がっており、かつて景洪の南側に広がっていた広大な田園は、1991年以降、市街化予定地として急激にその姿を変えている。まず、このような発展の背景について、地政学上の位置づけから概観したい。

図1は調査対象地の位置を示している。この図に見られるように、景洪はメコン川のほとりに位置する都市であるとともに、道路ネットワークの完成後には、中国とラオス、ミャンマーを結ぶ交通の要衝となることが期待されている。また、雲南省を通過しないラオスやミャンマーの道路建設が政治的な理由などによってなかなか進展しない中で、雲南省部分の道路の建設は順調に進んでおり、2000年までには、大半が高速道路化^(注2)される計画である。

経済交流を目的とした運輸インフラの整備と同様に、西双版纳を含む国境地域の観光開発も急速に進んでいる。特に毎年4月に行なわれる水かけ祭り（発水節）は、国内外から多くの観光客を集め、その期間中には臨時便の増発によって毎日10便以上の飛行機が昆明―景洪間で運航される。また、宿泊施設も毎年建設されており、1990年以前は客室50以上のホテルは版纳賓館のみであったが、その後の5年間に景洪賓館、版纳大厦、書林酒楼など7～8カ所に中型、大型のホテルが建設されている。当然ながら、海外からの観光客を誘致することによる外貨の獲得は、雲南省が西双版纳地域の開発を進めるうえで大きなインセンティブとなっている。

以上のような主要な要因以外にも、当地区内の構成民族にタイ系の民族が多くタイからの資本が流入しやすいなど、種々の発展要因によって景洪では急速な都市建設が進められ、その結果として農村の余剰労働人口を引き付けているのである^(注3)。なお、西双版纳への流入者が具体的にどのような理由で流入しているかについては第II節で詳述する。

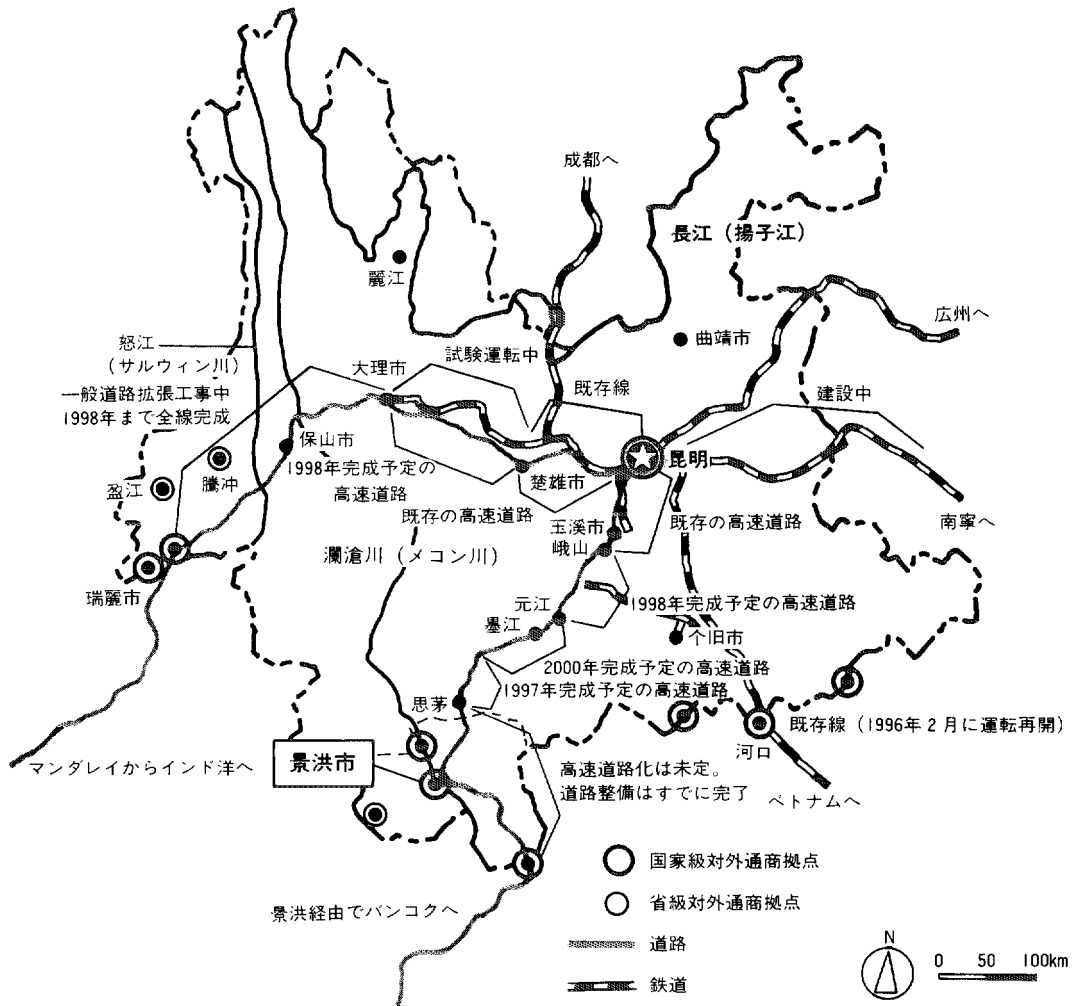
2. 新中国成立以降の漢族流入の歴史

漢族の流入は1949年の新中国成立直後に本格

化した。その流れは大きく3期に分けることができる(注4)。第1期は1950年代半ばから60年代半ばにかけてであり、州都景洪を建設する一方で、主にタイ族の住む平地と山岳民族の住む山間部のはざまに国営農場を建設していった。この時代に入植した人々の多くは、湖南省をは

じめとする中国各地の若い農民たちであり、新中国成立直後に開拓団として入植した人々である。彼らは激しい食糧不足と戦いながらも徐々に農地を拡大し、この地にゴムやサトウキビ等の経済作物をもたらすなど、先住民族の社会に大きな影響を与えた(注5)。だが、基本的に先住

図1 調査対象地の位置と雲南省の対外ルート(1997年5月現在)



(出所) 筆者作成。

民族と融合することはほとんどなく、現在に至るまで、空間的にも経済的にも先住民族とは一定の距離をおいて居住している。

漢族流入の第2期は文化大革命の時期であり、下放された中国全土の知識青年たちが、西双版纳に送り込まれてきた。彼らの多くは文化大革命後に西双版纳を後にしたが、教育機関や医療関係機関等にとどまった者も少なからずおり、先住民族に与えた影響も少なくないと思われる。だが、この時期の流入者については入手できる情報は非常に限られており、その実態をつかむのは難しい。

第3期は1980年代後半に本格化した改革開放政策の影響によるものである。それまで厳しく制限されてきた移動の自由が一部緩和されたことをきっかけとして、農村から都市への大規模な人口移動が引き起こされた。現在、流動人口の多くは上海や広州など沿海地方の大都市に集中し、「盲流」あるいは「民工潮」と呼ばれて大きな社会問題となっているが、その一部が西双版纳にも流入しているのである。第3期の流入者がそれまでの流入者と大きく異なる点は、先住民族(タイ族)と同じ地区に居住しはじめたことであり、先住民族への影響がより直接的である点である。本論文では、この第3期の漢族流入を対象とする。

(注1) この人口推計は、雲南省瀾滄江一公河区域合作協調領導小組での筆者によるヒアリングの際に得た数字であるが、正確な人口は把握できない。国家统计局城市社会経済調査總隊編『中国城市統計年鑑 1996』北京 中国統計出版社 1997年による景洪市の非農業人口は、1995年で8.47万人、自然増加率6.35%となっている。出所は明らかではないが、1995年に放送された「NHK スペシャル メコン川」では、景洪の都市人口を45万人と紹介している。ま

た、本稿で「景洪」という場合には独立した1つの都市の範囲(中国の城市の定義でいう「建成区」の範囲)を指し、「景洪市」という場合には行政区の範囲(面積6954平方キロメートルでほぼ日本の宮城県程度の面積にあたる)を指す。なお、景洪市は1995年に県から市に昇格したが、行政区の範囲に変更はない。

(注2) 高速道路といっても日本の高速道路のような自動車専用道路ではなく、中国の道路分類中の「高級」道路の中に含まれる、道路規格の高い道路を指しているものがほとんどである。

(注3) 筆者が1997年5月に行なった雲南省計画委員会でのヒアリングによれば、図1中の瑞麗、河口でも景洪と同様の開発が進められている。特に近年の瑞麗の開発速度は景洪にも増して急速である。今後はこれらの新興都市も調査対象に含め、民族混住のプロセスを比較検討するための材料とする予定である。

(注4) 新中国成立以後の漢族流入の歴史については、菅野「中国・西双版纳タイ族自治州……」で報告している。

(注5) 現地調査での聞き取り調査、および張立貝編『西双版纳国土経済考察報告』昆明 雲南人民出版社 1990年を参照。

II 流入漢族の実態

1. 流入者の分布

景洪に流入している漢族の居住形態は、タイ族の高床式住居の床下空間をいくつもの部屋に仕切って居住スペースとするものと、タイ族の土地に建設された集合住宅に居住するものに大別される。1989年の調査時には、タイ族レストランに住み込みで働く若い漢族労働者は見られなかった。その後、景洪の市街地に近い曼景蘭ではじめて集落への流入漢族世帯の居住が確認されたのは、1991年10月の調査においてであり、その居住形態は高床式住居の床下への居住であ

った。当時の床下部屋は、柱と柱の間に簡単に板や段ボール紙を渡して囲っただけの粗末なものであったが、このような居住形態が急速に定着するにつれて、短期間のうちにレンガ造りの恒久的な建築物へと変化していった。一方、1992年から93年の間には、集落に流入する漢族が急増するにつれて、床下だけではなく、庭先や空いた土地に集合住宅を建設するケースが現れるようになった。この集合住宅の建設は、タイ族自身が行なう場合と、漢族がタイ族から土地を借りて自ら建設する場合がある。さらに、タイ族の間で部屋や土地の賃貸が一般化するに至って、新築されるタイ族住宅の中には、初めからアパート経営を目指して建設される集合住宅も目立ってきた。このような流入漢族の居住の様子を分布図(1995年12月時点)に表すと、次の図2のようになる。

1989年調査時の対象3集落で漢族の居住が認められたのは、曼听における1戸のみであった。しかも、この世帯は、民族登録を漢族からタイ族に変更した^(注1)という一家であり、名目上は一応タイ族といえる世帯であった。その他、曼听路沿道のタイ族レストランに従業員として住み込みで働く漢族の若者も見られたが、彼らは景洪近辺の国营農場等から出てきて一時的に就業している若者たちであり、現在の流入者とは性質が異なっていた。

1991年の調査時に集落で流入者の居住が確認されたのは、曼景蘭でも最も市街地よりの住宅である。そのうちの1戸は、廃品回収業に従事するタイ族の従業員として住み込みで働いていた者たちであり、他方は流入者ではあっても雲南の大理を中心に居住分布をもつ白族の流入者であった。そのため、この時点で高床式住居の

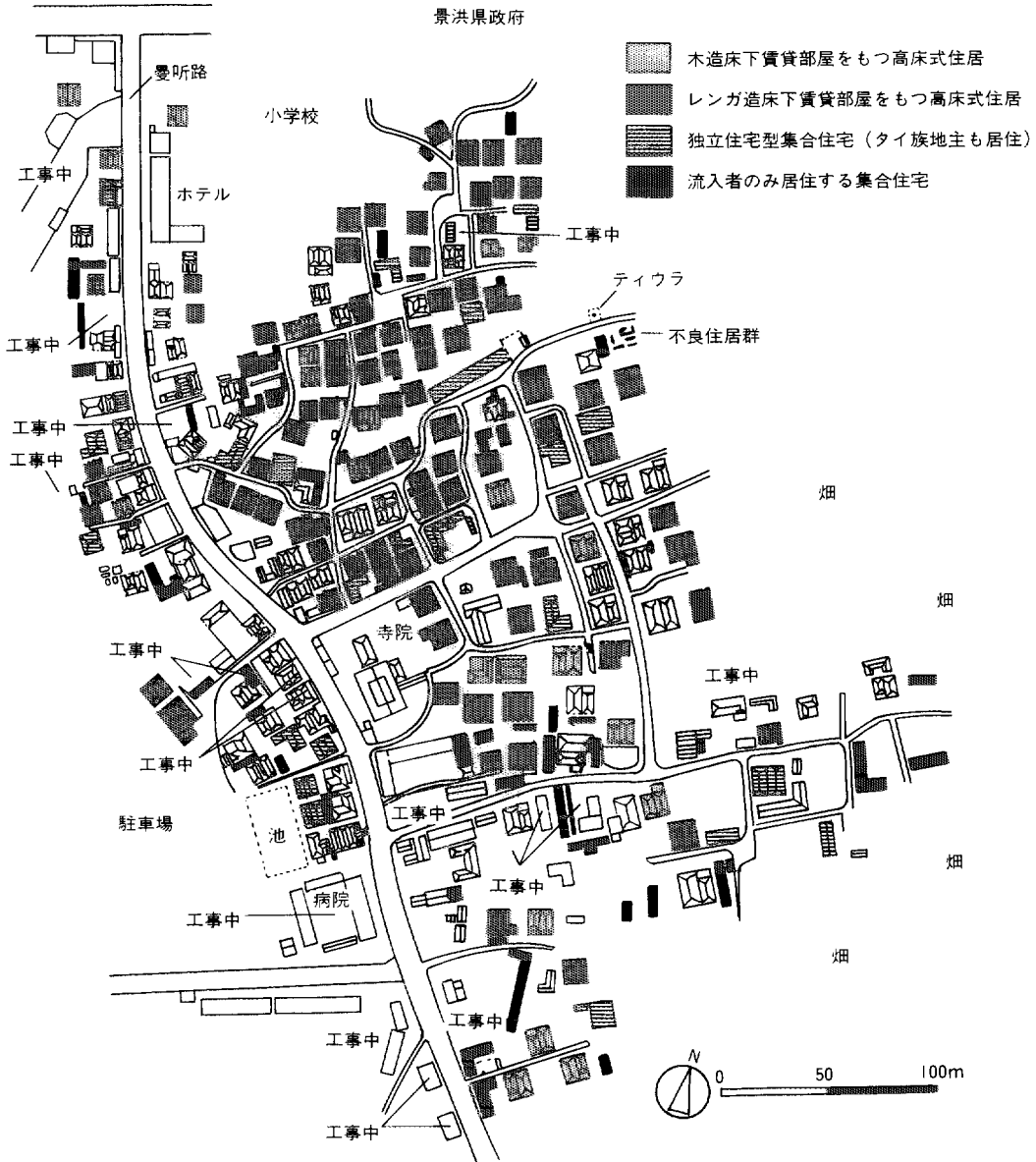
床下への居住が普遍的な流入者世帯の居住形態になることは、予測できなかった。

1993年の調査時点までに、曼景蘭における床下部屋への居住は急速に広がった。この時点の分布には、集落の北側(市街地に近い側)で床下賃貸部屋が多く、反対の南側では流入者が土地を借りて建てた集合住宅が多い一方で、集落の中心部では流入者の居住がほとんど見られないという、ドーナツ型の特徴的な分布が見られた^(注2)。また、この時点ですでに市街地からやや離れた曼听でも流入者の居住が広がりはじめた。

1995年の時点では、すでに曼景蘭の中心部でも流入者の居住が進み、曼听よりさらに市街地から遠い曼竜寛の集落にも流入者の居住がはじまっている^(注3)。このような急激な流入者の居住地拡大の背景にはいくつかの理由が考えられるが、タイ族が床下部屋や土地を貸すことによって得られる賃貸料収入が非常に大きなインセンティブになっていることが、何よりも大きな理由であろう。さらに、この2、3年の間に整備の進んだ集落内の舗装道路や、市街化の進行で農地を失うタイ族が急増していることなども、間接的な促進要因としてはたらいっているのではないかと推測される。なお、タイ族の現金収入、所有する農地面積の変化については次節以降で詳述する。

では、実際にタイ族1世帯当りでは、何世帯の流入者を借家人として抱えているのだろうか。表1は曼景蘭で無作為に選んだ40戸のタイ族世帯について調査した結果であるが、5～9世帯にピークがある一方で、十数世帯以上の流入者世帯を抱えているタイ族世帯も少なくない。40戸の平均では、タイ族1世帯当り流入者7.8世

図2 曼景蘭における流入者の居住地の分布 (1995年12月)



(出所) 現地調査により筆者作成。

帯の借家(床下住居)を有していることが分かった。さらにこれを人数で見た場合には、15人から24人にピークが見られるが、30人以上の借家人を抱えているところも少なくないことが明らか

かになった。世帯数の割に全体の人数が少ないのは、20代の独身者世帯や夫婦のみの世帯が多く含まれるほかに、中国におけるいわゆる一人っ子政策の影響もあって、1世帯当りの子供の

研究ノート

表1 曼景蘭のタイ族世帯40戸に見る
流入者(床下住人)の状況
(1996年1月)

(単位:世帯,人)

タイ族世帯数	40	タイ族家族人数(a)	179
床下世帯数	313	床下住人数(b)	719
タイ族住居1軒当りの床下世帯数			7.8
タイ族住居1軒当りの床下住人数			18.0
タイ族1世帯平均家族人数			4.5
床下世帯1世帯平均家族人数			2.3
流入者人口/タイ族人口 (b/a)			4.0

(出所) 現地調査結果をもとに筆者作成。

数が少ないためである。ちなみに調査した床下世帯313世帯の平均の家族人数は2.3人であり、他方タイ族の方は3世代が同居している場合があることと、2人目の子供まで出産可能であることのために、平均4.5人であった。

以上のように、外観からは一軒の独立住宅にしか見えないタイ族の高床式住居でも、20人以上の人々が生活を共にしているのである。

2. 流入者の実態

次にタイ族の高床式住居の床下や借地に集合住宅を建てて生活を送る流入者の特性について見ていくが、1993年に行なった調査(注4)の結果も参考としながら、この間の変化についても記述していく。

次の表2は、1995年12月～96年1月に行なった床下住人の調査結果を集計し、民族、出身地、年齢構成、職業、移住前の職業、流入者の年収、床下の借家1戸当りの家賃について示したものである。

表2に見られるように、民族構成では圧倒的に漢族が多く、94%近くを示している。1993年

表2 床下住人の属性、その他についての集計

流入者の民族構成	漢族	タイ族	ハニ族	白族	不明	合計				
	673	20	12	11	3	719				
流入者の出身地	四川	江西	雲南	湖南	河南	山西	広東	浙江	不明	合計
	260	170	130	95	28	20	6	4	6	719
流入者の年齢構成	0～9歳	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	有効回答合計			
	107	20	330	87	5	1	550			
流入者の職業	車引き	建設作業員	食堂従業員	小売業	食品加工・販売(屋台など)			旅行ガイド	修理工	
	283	82	80	53	14			13	7	
流入者の従前の職業	農業	建設作業員	学生	修理工	その他	無職	不明	有効回答合計		
	548*	25	2	1	3	2	16	597		
流入者の年収	1,000～2,000元未満	2,000～5,000元未満		5,000～1万円未満		1万円以上	有効回答合計			
	44	313		166		28	551			
床下の1戸当りの家賃 (月額)	50～59元	60～69元	70～79元	80～89元	90～99元	100～109元	110元以上	不明	合計	
	3	4	2	12	2	13	2	2	40	

(出所) 現地調査結果をもとに筆者作成。

(注) * 10歳以上で就労年齢に達しない子供の数も含む。

の調査では、雲南省内からの移住者の割合が約3割を占めていたこともあって、床下住人に占める少数民族の割合も約2割あったが、雲南省外からの移住者の増加に伴ってその割合は減少傾向にあるといえる。

出身地では四川省が最も多く、江西省、雲南省、湖南省が続いている。この集計には現れないが、移住は省の単位よりはるかに小さい村の単位で行なわれるのが一般的であり、同一家屋の床下には、同郷の移住者が寄り集まって生活している場合が多い。また、四川省、湖南省からの移住者が多い傾向は、1993年の調査でも同様であり、新中国成立直後から景洪周辺の国营農場に加わった移住者たちにも同様の傾向が見られる。だが、江西省からの移住は、1993年から95年の間の2年間に突発的に発生した現象で

(単位：人)

食肉加工業	踊り子	無職(パート)	その他	有効回答合計
3	2	2	14	553

ある可能性が高い。彼らへの聞き取り調査によれば、江西省からの移住者の多くは、近年の大規模な水害によって耕地や住宅を奪われた人々であるということであり、大規模な自然災害が多数の流動人口を生み出している実態が分かる。また、江西省は、全国から多数の「民工潮」を集めている経済成長の著しい上海、浙江省、広東省等に近接する省であるが、あえて遠方で、しかも辺境の都市である景洪に流入していることは注目される。だが、このように彼らが沿海地方ではなく景洪を選択した明確な理由については、残念ながら今回の調査では明らかにならなかったため次回調査時の課題としたい。

年齢構成では20代から30代前半の割合が際立って高いことが大きな特徴である。表2では20代に続いて0～9歳と30代が続いているが、1世帯の平均家族人数2.3人(表1参照)という数字と合わせてここから読み取られる典型的な流入者の家族像は、「若い夫婦とその幼い子供1人の核家族」という姿である。その一方で、40代以上と10代の若者は極端に少なく、かなり偏った人口構成であるといえる。タイ族の高床式住居40戸分の床下世帯の調査結果をもとに推計すれば、曼景蘭の全タイ族世帯数は約190世帯であり、さらに土地をタイ族から借りて建設された集合住宅が50棟以上あるので、曼景蘭だけで優に700人近い10歳未満の流入者の子供が存在することになる。当然ながら、この子供たちへの教育とその施設に関する問題は、今後顕在化して大きな社会問題になることが予測される。

流入者の職業構成については、圧倒的に車引き(輪タク運転手)の数が多。景洪の市街地の急速な拡大に公共交通機関の整備が追い付いていないことが、このような輪タクの増加につな

がっているであろう。輪タク運転手は、日本のタクシー会社のように会社組織から輪タクを借りて営業を行なっているが、同時に住まいの貸与をも受けている場合が多い。このような組織的な営業の背景には、地縁組織のようなつながりも予測されたが、輪タク運転手の出身地には、特に特徴的な傾向は見られなかった。

輪タク運転手に続いて多いのは建設作業員であったが、景洪で建設ラッシュが続いていることを見れば、この割合は予想外に少ない。この理由は建設現場に足を運んでみれば一目瞭然であるが、建設作業員のかんがりの割合が、建設中の建物やその周囲にテント等をはって生活している。そのため、床下部屋を対象とした本調査では、彼らが調査対象にのぼることが少なかったためではないかと考えられる。建設作業員に続いて、食堂従業員、小売業など、景洪の都市化の進行に伴ってサービス産業に従事する労働者の数が増加している。2年前の調査時に多かった食肉加工業（豚の屠畜と大まかな解体を専門に行なう）の割合は減少しているが、これは食肉加工を行なう流入者の世帯が集落縁辺部に片寄っており、ヒアリングの調査範囲に入りにくかったことが影響している。実際には、車引き（輪タク運転手）と同様、流入者にとっての一般的な職業のひとつになっている。また、1993年時の調査に比べて流入者の職業選択の幅が広がる傾向が見られ、それは後述するような収入面のばらつきにも反映している。景洪への定着が進む中で、より条件の良い職業に就く者が徐々に増えているのである。

流入者の年収については、2000元以上5000元未満と答えた者が全体の56.8%を占める一方で、5000元以上1万元未満と答えた者が30.1%、

1万元以上が5.1%もいる。この所得水準は、雲南省全体の平均（5149元——1995年統計^(注5)）と比較しても、全国の平均（5500元——95年統計^(注6)）と比較しても高い水準であり、彼らの住宅環境の劣悪さから見れば、意外なほど高い水準であるように思われる。職業と所得の関連では明らかな傾向は見られなかったが、1万元以上と答えた者の多くは小売業や旅行ガイド等、単に雇用されるのではなく、独自に事業をはじめた人々である。急激なインフレによって「万元戸＝富裕世帯」というイメージはすでにないが、床下住まいをする流入者の中にも新たに事業をはじめ、万元戸となる者が少なからず含まれているという事実は、水面下で力を蓄えている漢族の姿を象徴しているように思われる。

流入者の従前の職業については、そのほとんどが農民である。農村における余剰労働人口についてはさまざまなところで議論されているが、本調査の結果からも農村における雇用条件の厳しさを垣間見ることができる。この点については、景洪に移り住んだ理由についての質問に対する回答（複数回答、推定母数3400、サンプル数719、以下同）にもはっきりと表れており、全体の回答の55.3%（557人）を「職を求めて」が占めている。以下、「生活の向上を求めて」15.4%（155人）、「親戚・友人に呼ばれて」12.5%（126人）、「双版纳に興味があつて」10.9%（110人）、「その他」5.9%（59人）という順であった。

この質問は各回答にウェイトを置かず複数自由回答で行なわれたので回答にやや幅ができたが、全回答者の6割弱が「職を求めて」ということを移動の理由にあげている。また、2番目に多かった「生活の向上を求めて」という回答は出身地の農村での苦しい生活を反映してい

るが、その背景にもやはり農村での雇用条件の厳しさが大きく影響しているといえる。3番目に多かった「親戚・友人に呼ばれて」という回答は、流入者の移動の特徴を示している。1993年時の調査からも、かなりの割合の流入者が地縁関係によって移動し、その関係を移住先での生活の基盤としていることが分かっている。したがって、設問を自由回答ではなく、調査者があらかじめ準備したいくつかの選択肢から複数選択させるような方法をとっていれば、より高い比率を示す可能性のある回答であったといえる。そして、これとほぼ同数あった「西双版纳に興味があって」という回答は、「南国の観光地」として、あるいは「成長の四角形の中心都市」として、たびたび報道される西双版纳の知名度の高さを示しているのではないと思われる。

3. 流入者の意識

床下の流入者に対して、現在の生活に対する満足度について質問した結果は、「とても満足」13.5% (93人)、「満足」78.6% (543人)、「変化なし／どちらとも言えない」6.5% (45人)、「不満」0.7% (5人)、「とても不満」0%、「不明」0.7% (5人)であった。この結果は「とても満足」か「満足」という回答が9割を超える高い比率を占める一方で、「不満」と感じている者が非常に少ないことを示している。これは、狭くて暗い床下部屋に住まい、激しい肉体労働を強いられている現実にそぐわない回答のようにも思われる。だが、詳しく話を聞くと、生まれ故郷の農村での生活がいかに苦しかったかが分かり、それに比較すれば現在の方がよい、ということを指しているのだということが理解された。とにかくも家族が餓えずに生活できている

ということで、彼らは一応の「満足」を得ているのである。

彼らに将来の定住についての可能性を聞いたところでは、「出身地に帰る」69.9% (497人)、「景洪に住み続ける」15.0% (107人)、「決めていない」7.9% (56人)、「再び移住する」3.4% (24人)、「その他」3.8% (27人)、「不明」0%という結果であった。この結果から、多くの流入者が、将来出身地に帰ると考えていることが分かったが、今のところ彼らと故郷とのつながりは非常に薄いように思われる。彼らにとってはかなり高額な交通費のために、春節の際も帰省する者はほとんどおらず、比較的高額な所得を得ている者も含めて送金をしている者も思ったほど見当たらなかった。故郷の農村に帰っても仕事を見つけることはほとんど不可能であろうから、結局、現実にはこの土地に根を下ろしていくことになるのではないだろうか。これらの点では、単身で出稼ぎに出、都市戸籍が取得できないためにその多くが出身地へ帰っていく沿海地域の「民工潮」とは、やや性格が異なるといえる(注7)。

それでも約70%が故郷に帰ると答えた理由については、今回の調査では明らかにされなかったので今後の課題としたい。なお、大きな水害によって移住を余儀なくされた江西省からの流入者の多くは、明確な帰郷の意志を示している点で、他の地域からの流入者とは異なるようである。今のところ、被災地からの一時的な避難という性格が強いのかも知れない。さらに今後の動向が注目される場所である。

最後に、流入者とタイ族の関係を知るために、現在の家主(タイ族)についてどう思うかを尋ねた結果では、「とても良い関係」23.8% (145人)、

「まあまあ良い関係」11.3% (69人), 「どちらとも言えない」62.9% (383人), 「あまり良くない」2.0% (12人), であった。「とても良い関係」と「まあまあ良い関係」で35.1%を占めている一方で、半数を超える62.9%は「どちらとも言えない」という曖昧な回答だった。後述するように、労働することなしに自分たちよりもはるかによい生活を送り、なおかつ彼らにしてみればかなり高額の家賃を徴収するタイ族に対して、複雑な感情をもつのはむしろ自然なのではないかと考えられるが、これらの回答には筆者を除く調査者が地元の人間であったことが影響したのではないと思われる^(注8)。

(注1) 少数民族の方が出産数、教育などの点で優遇されているために、中国全土で見た場合にも少数民族として民族登録する者の数が増えていることが報告されている(毛里和子・橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』山川出版社 1987年 436~471ページ参照)。この場合もそのような世帯であると考えられる。この元漢族の世帯は、1991年に周囲のタイ族とは形態的に異なるものの高床式住居を新築し、周囲のタイ族と同様に93年から床下部屋を流入者世帯に貸している。

(注2) 集落における流入者の居住地拡大のプロセスについては、次の論文で詳述している。菅野博頁「中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪の周辺集落にみる流入人口の居住環境への影響と都市化のプロセス——都市・農村のマージナルエリアにおける民族混住についての研究——その1」(『日本建築学会計画系論文報告集』第482号 1996年4月) 115~122ページ。

(注3) 集落人口の増加については、曼景蘭のタイ族の人口は1982年の804人(雲南省人民政府経済計画局での筆者のヒアリングによる)から、95年の推計約855人(曼景蘭の全タイ族世帯数190世帯に、調査を行なった同集落100世帯の平均家族人数4.5人〔後出表1参照〕をかけた数値)まで、微増にとどまっている。一方、床下に居住する漢族は、1989年の世帯数0から、93年の約700世帯、95年の約1400世帯(推計約

3220人——全床下世帯数に床下世帯家族人数の平均2.3人〔後出表1参照〕をかけた数値)へと爆発的に増加している。なお1993年調査時の集落人口については次の論文で述べている。菅野博頁「中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪の周辺集落にみる集落環境の悪化についての考察——都市・農村のマージナルエリアにおける民族混住についての研究——その2」(『日本建築学会計画系論文報告集』第489号 1996年11月) 141~149ページ。また、流入者の居住年数については、菅野「中国・西双版纳タイ族自治州……」で取り上げたが、2年未満が過半数を占めていた。

(注4) 菅野「中国・西双版纳タイ族自治州……」を参照。ただし、1993年の調査では、調査対象者のサンプル数が95年に比して130人と少なかったため、単純に比較することはできない。あくまで参考のための材料とする。

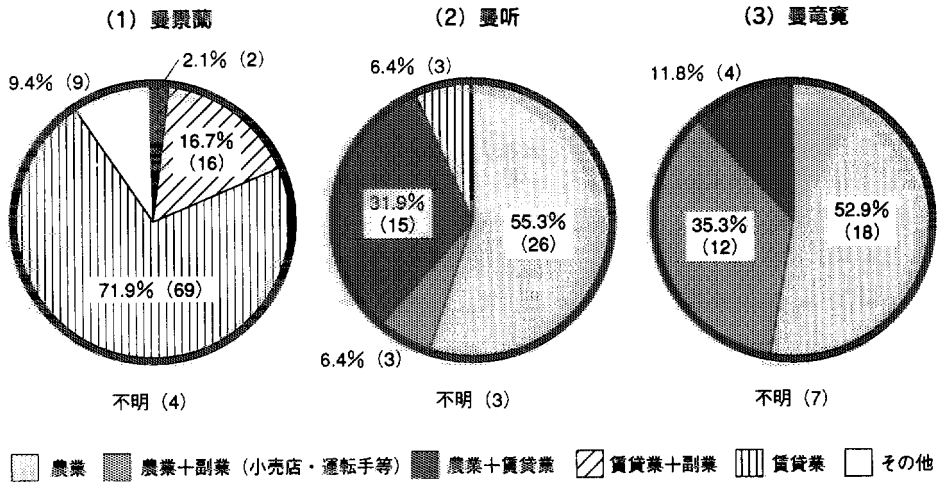
(注5) 国家统计局編『中国統計年鑑 1996』北京 中国統計出版社 1996年。

(注6) 同上年鑑。

(注7) 沿海地方の経済特区に集中する労働力の大部分は、臨時工として雇われている若年労働者である。そのため長期的に勤めることができず、2~3年で出身地に戻る者がほとんどであるといわれている。また、沿海部の経済特区では、農村戸籍の流入者が経済特区の都市戸籍所有者と結婚した場合、その子供は農村戸籍となるため、このような組み合わせによる結婚は非常に少なく、流入者が結婚を機に流入先の土地に定着することもまれであるといわれている。だが、現在沿海部の大都市に形成されつつあるスラム地区では、工場をやめてからも故郷に帰らずにいる人々や、非合法で経済特区に入ってきた人々など、長期的に都市にとどまる者も増えているといわれている。以上、朴貞東『経済特区の総括』新評論 1996年、等を参照。

(注8) 高床式住居の床下に居住する漢族に対して、聞き取り調査を中心になって行なった調査員は筆者を除いて2名で、そのうち1名は地元のタイ族であり、曼景蘭にも親戚が多い。もう1名は地元の漢族でやはり曼景蘭にも顔見知りが多かった。このような調査者の条件が調査結果にできるだけ影響を及ぼさないように調査票を設計したが、それでも意識調査等については微妙に影響を与えたことは否定できない。

図3 3集落住人の主な収入源 (1995年)



(出所) 現地調査により筆者作成。
 (注) カッコ内は実数。「不明」は比率に含めず。

III 先住民族タイ族の実態

1. タイ族の生活の変化

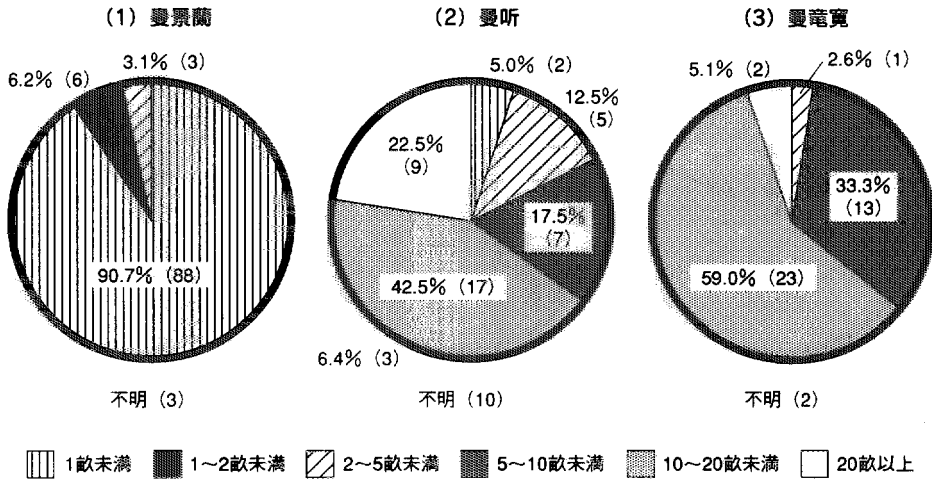
1995年12月～96年1月の曼景蘭の集落調査では、100世帯のタイ族住居と高床式住居40戸分の床下部屋(313世帯, 719人)を調査したが、その結果、タイ族の高床式住居1軒の床下には平均7.8世帯の流入者世帯が確認でき、18.0人の床下住人が生活を送っていることが分かった。タイ族の平均の家族人数が4.5人、床下住人では2.3人であったので、床下以外に居住する漢族を除いても、集落全体では先住民のタイ族人口より床下の流入者人口の方が約4倍も多いことが推定される(表1参照)。一見、高床式住居の連なる曼景蘭の集落ではあるが、人口の面ではすでに漢族の集落と呼べるような状況に至っているのである。当然ながら、このような環境はタイ族の生活に大きな影響を及ぼしている。

特に大きな影響は、タイ族の就業面での変化

である。より具体的には、それまで農業を主な生業としていた生活から、床下部屋の賃貸収入によって農業を放棄し、事実上、ほとんど労働らしい労働を行なわなくなってしまったことである。この様子は、9割以上の世帯で床下、あるいは土地の賃貸を行なっている曼景蘭と、賃貸業がこれから盛んになる兆しが見える曼听、そしてまだ賃貸業のほとんど行なわれていない曼竜寛の3つの集落住人の主な収入源の比較(図3)によって明確に見ることができる。

図3-(1)は、曼景蘭の住人の主な収入源であるが、約72%の住人が賃貸料収入が主な収入源であると答えている。これに、賃貸業を行ないながら副業も行なっている者を加えると、実に88.6%の住人が賃貸料収入に依存していることが分かる。これに比べて曼听(図3-(2))では、賃貸料収入を主な収入源としている者が6.4%、農業と賃貸業を合わせて行なっている者が31.9%で、まだ農業を主な収入源としている者が過半数を超えている。さらに曼竜寛(図3-(3))で

図4 3集落住人の農地面積（1995年）



(出所) 現地調査により筆者作成。

(注) かつこ内は実数。「不明」は比率に含めず。1畝=6.67アール。

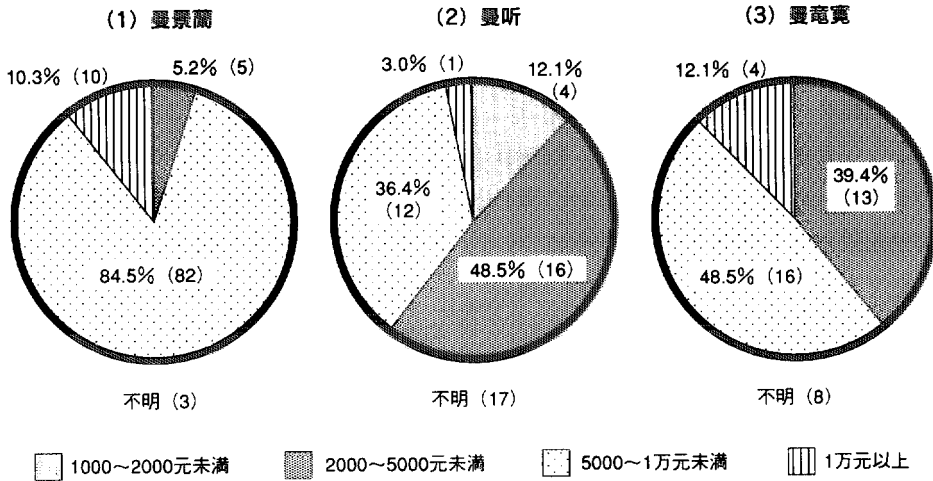
は、賃貸業をはじめの者が現れてはいるものの、すべての世帯で農業を主な生業としている。まだタイ族の間に賃貸業が一般化する以前の1989年、91年の集落調査では、曼听路沿いのレストラン経営者と教師、および僧侶を除いては、曼景蘭、曼听的集落住民とも、すべて農業を主な生業としていた。したがって、このような変化は1992年以降の2、3年の間に急激に進行した現象であることが分かる。

離農の急速な進行は、所有する農地面積の変化にも如実に表れている。図4-(1)は曼景蘭の住人の所有する農地面積であるが、9割以上が1畝未満(1畝=6.67アール)の農地しか所有していない。他方、曼听ではまだほとんどの住人が農地を手放してはおらず(図4-(2))、曼竜寛ではほとんどの住人が農業を生業とするだけの土地を保有している(図4-(3))。曼景蘭でこのように離農が急速に進んだのは、既述のように賃貸料収入によるところが主な要因であると考えられるが、それとともに、景洪の市街地がか

つて曼景蘭の西側に広がっていた広大な田園地帯に大きく拡大したことによる影響も大きい。

北側を山地に、東側をメコン川に遮られている景洪の市街地は、拡大の方向が南から西の方向に限られている。だが、西側に解放軍の施設や国営農場など既存の施設があるのに対して、南側には本調査で対象とした3集落を除いては田園地帯が広がるのみであったので、1992年から93年にかけて、この田園地帯は市街地予定地として一斉に用途替えされることになった。1993年には一時広大な更地となったが、翌年には早くも道路の建設が進行し、ホテルや市場、公園などが急ピッチで建設されている。このような農地の喪失を機に離農したタイ族も少なくない。また、農地を手放す際には、土地所有権の譲渡が行なわれ、事実上土地を所有していたタイ族は少なからぬ現金を手にしたようである。その金額について、正確に把握することはできなかったが、聞き取り調査での感触では数万元を超えない範囲のようであり、現在の彼らの年

図5 3集落住人の年収(1995年)



(出所) 現地調査により筆者作成。
 (注) カッコ内は実数。「不明」は比率に含めず。

収に比して極端な高額ではないと推測される。
 上記3集落住人の年収についての調査結果を図5-(1)~(3)に示す。予想どおり、賃貸料収入の多い曼景蘭の住人の収入が全体的に高い値を示している。アンケート調査によって得られた年収の度数分布から導かれた平均年収は、曼景蘭8067元、曼听5060元、曼竜寛6833元で、雲南省の所得水準に比べても、当然ながら先の流入者の水準に比べても高い水準であることが分かる。だが、これらの所得の大部分を占める賃貸料は、平均(1ヵ月1世帯)92元(表2参照)であり、10世帯以上の借家人をもつタイ族世帯が3割を超えていたことを考えると、この調査結果の値はやや低く見積られているようにも思われる。その原因については借家人にかかる光熱費の支払い関係や借家の建設費等を明らかにする必要があり、今後の調査の課題としたい。また、曼竜寛で年収が1万円を超えている者のほとんどは、土地所有権を譲渡した者であるということであり、まだ純農村的性格の濃い曼竜寛

の平均年収を押し上げている。一見、市街化の影響が薄いように見える曼竜寛でも、その影響が徐々に及んできていることが分かる。

賃貸料収入による現金収入の使い道については、先の40世帯の高床式住居での調査時に聞き取り調査(複数回答、推定母数190世帯)を行なったが、その結果「生活費」と答えている者が最も多く70.0%(28世帯)、続いて「貯蓄」が35.0%(14世帯)、以下、「増築」10.0%(4世帯)、「賃貸部屋の光熱費」「小遣い銭」「その他」がそれぞれ7.5%(3世帯)という結果であった。このように、実際の生活においても、賃貸収入が直接タイ族の生活を支えていること、そして貯蓄の一般化に見られるように、タイ族の貨幣に対する価値観も急速に変化していることが明らかになった。その一方で、「賃貸部屋の光熱費」「小遣い銭」と答えた人々は、「賃貸業は思ったほどもうからなかった」と感じている人々のようであり、その原因は、盗電や盗水が頻繁に行なわれていることにあるようであった。

実際、このような流入者による盗水、盗電に対抗して、徐々に床下の各世帯ごとに水道、電気のメーターをつけるケースが目立ってきている。

2. 先住民族タイ族の意識

以上のようなタイ族の生活の変化を、彼ら自身はどのように感じているのであろうか。床下の賃貸部屋が広まって以降の生活の変化について質問したところでは、40世帯中28世帯(70.0%)のタイ族が「収入が増えて豊かになった」あるいは「やや豊かになった」と答えており、彼ら自身、生活の豊かさには満足している様子がうかがわれた。一方で、12世帯(30.0%)のタイ族が「特に変化なし」という回答であるのは、やや解釈に苦しむところである。聞き取り調査時の感触では、賃貸業をはじめ以前からすである程度の豊かさを獲得しており、賃貸料収入によってもさほど変化はない、もっと端的に言えば、漢族のおかげで豊かになっているわけではない、という意思表示が感じられた。

では、このようなタイ族は床下の漢族に対してどのような感情を抱いているのだろうか。これは、先に床下住人にタイ族の家主について質問した際とは逆に、質問者が地元民であったためか、かなり本音に近い意識を探ることができたように思う。

まず22世帯(55.0%)の回答が、とにかく「床下がうるさい」という回答であった。確かに、南国で密閉度のきわめて低い住宅の床下に十数人以上の住人がいれば、生活騒音が気になるのも致し方ないところであろう。また、前述のように漢族は湖南省、江西省のように遠方からやってきた人々であるために、彼らの方言をタイ族が理解することはかなり困難であり、余計に「うるさい」と感じているようであった。「うる

さい」の22世帯に続くのは、「不衛生」7世帯(17.5%)、「嫌い、いやだ」5世帯(12.5%)、など否定的なものが並ぶ。好意的なものを合計してもわずかに4世帯(10.0%)のみであり、しかもそれは雲南省内からの移住者に対して例外的に認められる傾向であった。やはり言葉の問題が大きく影響しているといえる。

タイ族側から見た流入者に対する意識は、先に見た流入者側から家主のタイ族に対する意識が比較的好意的、あるいは曖昧であったことに比べて、全く遠慮のない回答であった。これらの回答にも現在の床下と床上との力関係が浮き彫りにされているようである。

IV 西双版纳における民族混住社会の特色と問題点

経済活動の自由化に伴う都市の経済活動の活発化、そしてそれとは裏腹の関係にある農村の余剰労働人口の流動化という時代の流れの中で、漢族と少数民族が同じ居住地に生活するという状況が生まれてきた^(注1)。特に今後辺境貿易^(注2)が活発化するにつれて、少数民族が多数居住する辺境地域での漢族と少数民族の混住化は一層加速することだろう。本稿のまとめとして、現地での聞き取り調査の結果、および前報など^(注3)での調査結果を一部援用しつつ、民族混住の結果生じた新たな状況を全般的に整理し、今後の民族混住社会を考えるうえでの手掛かりとしたい。

1. 混住化に伴うタイ族社会の明暗

西双版纳の都市化が進行し、漢族との混住が進む中で、タイ族にもたらされた恩恵としては、現金収入の増加による物質的豊かさに関する

ものと、社会サービスに関するものがある。前者については、収入が飛躍的に増えたために、(1)家具、電化製品等の所有が一般化したこと、(2)住宅が大型化するとともに、それまでの住宅にはなかったトイレ、シャワールームなど快適性を求める設備が整ってきたこと、さらに可処分所得の増加により、(3)ビリヤード、ファミコン、カラオケなどの娯楽の種類、量とも以前とは比較にならないほど増大したこと、などがあげられる。また、このような購買欲を促したもののとして、テレビをはじめとするメディアの影響も大きく作用したと考えられる。そして、社会サービスに関することでは、(4)交通機関が整備され移動の便がよくなったこと、が第1にあげられ、現在の陸路、空路、水路の整備状況から見て、今後ますます外部との交流は活発化するだろう。その他にも、(5)医療などの社会サービスが充実してきたこと、(6)子供の教育環境が整ったこと、などが聞き取り調査から明らかになった^(注4)。

他方、タイ族社会に新たにもたらされた問題は、新たにもたらされた恩恵よりも多岐にわたっている。まず、社会全般に見られる現象としては、前出の集落ごとの所得比較では明らかにはならなかったが、世帯単位で見ると(1)市街地近郊で土地や住宅を有しているタイ族と有していないタイ族の間での貧富の差の拡大、があげられる。その理由は先に見たように流入漢族に賃貸するスペースがあるかないか、が収入に大きく影響するからである。しかも、(2)流入漢族の急増により地元の若者を中心として失業者が急増したこと、のために賃貸業を行えない者は、その他の一般的な職業に就くことも非常に難しくなっている。

社会サービスに関することでは、(3)市街化の進行と集落人口の急増に対する社会インフラの整備の遅れ、そしてそれに伴う集落の衛生環境の悪化、が顕在化してきていることがあげられる。幸い尿尿は畑に撒かれ、排水はメコン川に放流されるので、目に見えて大きな問題にはならないが、1991年頃までは豚などの家畜が処理していた生ゴミは、床下が流入者の居住スペースとなって家畜飼いが激減したために、集落の縁辺部などに不法投棄される場合が目立つ。そのため、1993年からゴミ収集サービスがはじまったが、車の入れるような十分な幅員をもった道の少ない集落内にゴミ収集車が入ることはできず、表通りに近い住人だけがゴミ収集サービスを楽しむために、(4)公共サービスの偏り、という新たな住人の不満を呼び起こしている。さらに、現在の人口増加や農地の減少、そして環境の問題を考えれば、尿尿処理や排水処理の問題も近い将来大きな課題となることは明らかである。

日常生活に関することでは、(5)日中からの泥酔者や売春の増加による風紀の乱れ、が目につくようになった。労働から解放されて時間をもてあます一方で、多額の現金収入を得られるようになった影響が、直接的に表れている現象である。さらに、(6)伝統文化への商業主義の影響、も非常に大きく、特に祭日と平日の区別が希薄になってきている。その理由は、集落幹線道路沿いのタイ族料理のレストランのほとんどがタイ族の経営から漢族の経営に代わった後、漢族の経営者たちが客よせのために、毎日タイ族の祭りの音楽を演奏させているからである。タイ族の伝統芸能はことごとく商業主義に結びついており、年に一度であるはずの水かけ祭り

も、今では毎日どこかしらで行なわれている。

2. 流入漢族にとっての明暗

流入した漢族にもたらされた最も大きな恩恵は、(1)とりあえず飢えずに生活できている、ということであろう。彼らを送り出している側の農村の状況は確認していないが、彼らの話から想像されるところでは、日々の食事さえまならない、という状況のようである。しかも収入を得られる仕事もなく、生活していくためには移住するしかなかった、というのが実情のようであった。そして、このような移住には、流入者間の地縁関係が大きく関与しているが、その結びつきによって(2)比較的収入が安定していること、も彼らが移住することによって得られた恩恵のひとつであろう。地縁組織を形成するにあたっては、流入先に床下の集合住宅という、地縁関係者たちが集住するのに大変適した環境が用意されていたことも、彼らが絆を強め、協力しあうのに非常に都合の良い条件であったといえる。

都市全体として見た場合、高床式住居の床下のような集住に適した環境が存在したために、(3)スラム地区が発生していないこと、は特筆に値するのではないだろうか。改革開放政策が進展する以前の中国では考えられなかったことであるが、現在中国各地の大都市でも大規模なスラムが出現し、犯罪の温床になっているといわれている。その点、西双版纳に見られる混住形態は、スラム地区を生みにくい性格を有している。ただし、市街地に近接する曼景蘭では、すでに床下の空間が飽和状態に近づいており、集落の外れでは今後スラム化しそうな地区が出現しはじめている(図2参照)。

次に、流入漢族が抱えることになった問題で

あるが、(1)生活環境が劣悪なこと、は明らかである。とはいえ、流入者たちの従前の居住地、あるいは中国人の平均的な居住空間に比べれば、彼らが住まう床下の暗く、狭い空間も、将来はともかく現在はさほど問題にはならないのかもしれない。それよりも(2)子供の教育環境が整っていないこと、(3)流入者たちの医療、保健問題、地域衛生の問題、など社会サービスに関する問題、は今後顕在化していくことだろう。さらに、まだ実際には発生していないが、(4)メコン川の氾濫による自然災害の問題、も近い将来に発生するであろう。それは、タイ族が高床式住居に居住している風土的な理由を考えれば明らかであるが、特に曼听や曼竜寛では数年に一度発生するメコン川の洪水によって、床下が水に浸かってしまう。1991年秋の洪水の際は、まだ床下部屋は普及していなかったが、次に発生した際にはどのような事態を招くことになるのだろうか。幸い、日本の洪水に見られるような集中豪雨とそれに続く激しい濁流、という洪水のイメージではなく、メコン川上流で降雨が続いた後に何日か経ってゆっくり水かさが増していき、やがて自然堤防から水があふれる、という大陸的な洪水であるので、人命に関わるような被害にはなりにくいと思われるが、床下に住まう流入者たちは新たな対応を迫られることになるだろう。

(注1) このような開放経済の広がる以前にも、中央政府が政策的に行なった同化政策による漢族の辺境への移住は中国全土で見られたが、この政策的移住と現在の農民の自由意志による移住の意味、あり方の違いは大きい。同化政策による漢族の辺境への移住については、毛里和子「新中国成立前夜の少数民族問題——内蒙古・新疆の場合——」(野沢豊ほか編『講座中国近現代史7 中国革命の勝利』東京

大学出版会 1978年), 等を参照。

(注2) 中国では、中央政府の干渉を受けずに地方政府の許認可のもとで行なわれる貿易を「辺境貿易」と呼び、地方政府の許可もなく行なわれる貿易を「密貿易」と呼んで区別している。雲南省の貿易品目としては、繊維製品、日用品などを輸出し、農林産品や原材料、宝石などを輸入していたが、近年、タイの工業製品がミャンマーを経由して大量に雲南省に流入しているといわれている。他方、雲南省側においても近年の工業化による工業製品の販路をタイに求めるとともに、タイやベトナムの港を経由して海外にも販路を求める動きが活発化している。

(注3) 菅野「中国・西双版纳タイ族自治州……」／菅野「中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪……その1」／菅野「中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪……その2」／毛里「新中国成立前夜の……」等を参照。

(注4) 集落環境の都市化について地域住人が何を改善と考え、何を改悪と感じているかについては、1994年の3～5月に対象3集落と市街地に居住するタイ族、および主に市街地に居住する漢族に対して意識調査を行なった。これらの調査報告は別稿で準備している。

むすびにかえて

——マクロな視点から見た西双版纳的民族混住の特色——

本稿で見たように、都市化に伴う民族混住が進む中で、都市周辺の先住少数民族社会ではさまざまな社会問題が発生している。だがその一方で、アフリカや東欧、あるいは隣国のミャンマーやラオスで見られるような激しい民族間の対立が発生していないことは、特筆すべきことであるといえるのではないだろうか。本稿のむすびにかえて、マクロな視点から見た西双版纳的民族混住の特色を概観しつつ、この地域における混住社会の行方について考えてみたい。

西双版纳的民族混住の特色について見た場合、

多数派民族である漢族が急速にその居住域を拡大しているにもかかわらず、目立った民族間の問題が発生していないことは、やはり注目に値するのではないだろうか。特に民族の構成において多くの類似点を有する西双版纳周辺のラオス、カンボジア、ミャンマー等の国々と比較した際に、その差が際立つのではないだろうか。この点についての解明にはまだ時間を要するが、筆者の推測を含めて述べれば、1950年代から60年代に西双版纳に流入して国営農場を築いた漢族にしても、90年代に流入している漢族にしても、彼らは先住民族より経済的にも社会的にも低い立場の人々として先住民族に認識されている一方で、結果的に少数民族に文化的、物質的な豊かさをもたらしたことが、ひとつの鍵になっているのではないだろうか。

本稿で報告したように、流入する漢族は、今は多くがタイ族の住居の床下に住んでおり、タイ族は文字通り彼らを見下げつつ、彼らから得られる賃貸料収入に満足している。そして、最近では生業であった農業を放棄する一方で、一人でも多くの借家人を獲得しようと積極的に漢族を呼び込んでいる様子が見られるのである。このような状況にあって、漢族の側は着々と居住地域を拡大しており、徐々にではあるが経済的にも力をつけてきている。この状況が漢族の政府によって計画的に生み出されているものであるのかどうかは別としても、民族間の直接的な軋轢を回避しながら漢族の居住地域を拡大する方法として、実に巧妙なプロセスを踏んでいるように思われるのである。ただし、フランスに流入したマグレブ諸国の人々やドイツに流入したトルコ人のように、先住民の職を奪い生活を圧迫するような状態が将来的に顕在化すると、

新たな摩擦を生ずる可能性は十分にあり、今後の推移に注目していきたい。

また、本稿で取り上げた景洪周辺の3集落に見られるように、都市化の進行と民族混住の度合いが同調していることも、1990年代の西双版纳の特色といえる。既述のとおり、1950年代や文化大革命期の流入者の多くは都市から離れた農村に入り、新たな換金作物をもたらすなど先住民族に大きな影響を与えたが、同じ集落と一緒に居住することはなく、先住民族の生活様式まで変化させることはなかった。だが、近年の流入者たちは、直接先住民族の住宅の一部に住まい、先住民の労働形態や生活形態そのものまで大きく変化させている。そして、その影響は都市からの空間的な距離によって異なり、市街化の進む集落ほど混住化による多大な影響を受けている。

西双版纳における都市化をどのように定義づ

けるべきかを本稿で論議することは避けるが、漢族流入以前、タイ国のように都市を中心に国家が栄えることもなく、1980年代まではほとんど第2次産業、第3次産業の存在しなかった西双版纳において、近年の都市開発によってもたらされる都市的な文化、都市的な生活様式は、タイ族が初めて経験する衝撃であろう。したがって、現在の曼景蘭に見られるような一種の混乱は回避しがたいものであるのかもしれない。今後、都市を中心とした全く新たな文化が持ち込まれる中で、タイ族がどのような独自の都市文化を形成するのか、その模索は今始まったばかりであり、現在の構図に見られる都市化(≒混住化)の過程の中に、そのあるべき方向性へのヒントが存在するということはできないだろうか。

(財団法人国際開発センター調査部)